

[書評]

『韓国文学の中心にあるもの』

(斎藤真理子、イースト・プレス、2022年)

銭坪 玲子

著者と本書の紹介

著者である斎藤真理子は2015年に、パク・ミンギユ著『カステラ』(ヒョン・ジェフン・斎藤真理子共訳、クレイン、2014年)で第1回日本翻訳大賞を受賞した翻訳者、著述家である。日本でも大きな話題となったチョ・ナムジュ著『82年生まれ、キム・ジョン』(筑摩書房、2018年、以下、『キム・ジョン』と表す)を翻訳したことでよく知られている。これまで数多くの韓国文学作品の翻訳に携わってきた著者が、1945年以降の韓国文学作品を複数取り上げ、韓国文学に息づく「能動性」「生命力」の淵源や韓国文学の中心にあるものについて深く思考し、思いを綴ったのが本書である。

本書は単なる韓国文学の読書案内ではない。2010年代後半から1945年へ、時代をさかのぼる形式で、それぞれの時代を代表する文学作品について紹介されているが、文学作品を通して、韓国の社会や歴史、政治、家族、個人にまで光があてられ、大胆かつ、きめ細やかな考察が加えられている。日本による植民地化、朝鮮戦争、南北分断、軍事独裁政権による強権的支配等の韓国の近現代史を語らずして、1945年以降の韓国文学を語ることはできないという著者の強い思いが随所から湧き出しているといえるだろう。

一個人では変えることのできない社会構造の存在と、社会構造の中で「選択」を強いられ、翻弄され続けた人間たちの儚さに対する共感が著者の言葉から、言葉と言葉の間から、溢れ出している。本書にも登場する、声を持たない人々の声を代弁してきたチョ・セヒや石牟礼道子のような作家と同様、本書の著者である斎藤もまた、社会や時代に虐げられてきた人々の声をすく

い上げることを使命としているかのようである。一方では社会システムの存在や抗えない時代のうねりに、一方では一人ひとりのあまりに脆弱な人々の存在に、マクロとミクロの双方からの視線を注ぎ、確かな知性と軽やかで柔軟な感性で韓国文学を紐解く著者は、文学者でもあり専門的な訓練を受けた社会学者のようでもある。

隣国である韓国と日本は現在、生活水準や抱えている社会問題等に類似点も多いが、日本は植民地化された歴史もなく、沖縄を除いて地上戦に直面した経験もないため、韓国とはたどってきた歴史が大きく異なる。実際、朝鮮戦争はあくまで「休戦」状態にすぎず、次の戦争について警戒心を持ち続けてきた国であり、現在でも兵役がある韓国には日本にはないものがある。「現在の韓国の文化コンテンツに見られる敏捷で聡明な繊細さは、このような重い歴史をくぐり抜けた足腰に支えられているとあってよい。本書では、この足腰部分の解剖図を目指してみた」と著者はいう（斎藤 2022：3-4）¹⁾。

本書の構成は、以下のようになっている。

まえがき

第1章 キム・ジヨンが私たちにくれたもの

第2章 セウォル号以後文学とキャンドル革命

第3章 IMF 危機という未曾有の体験

第4章 光州事件は生きている

第5章 維新の時代と『こびとが打ち上げた小さなボール』

第6章 「分断文学」の代表『広場』

第7章 朝鮮戦争は韓国文学の背骨である

第8章 「解放空間」を生きた文学者たち

終章 ある日本の小説を読み直しながら

あとがき

本書関連年表

本書で取り上げた文学作品

主要参考文献

目次を一見しただけでも、決して気軽に手に取れるような書籍とはいえないことが分かるであろう。翻訳者であるからこそその文学作品に対するオマージュや微に入り細を穿つ分析内容、幅広く深い洞察力によってしたためられた文字群から生み出された、この知的空間は他では代えがたいチャレンジングでスリリングな物語性に満たされている。

『キム・ジョン』のインパクト

近年、韓国のいわゆるフェミニズム文学といわれるジャンルの文学作品が日本語に多く翻訳されているが、『キム・ジョン』はその代表的な作品の一つである。本書は、「キム・ジョンが私たちにくれたもの」という章から始まる。

2000年に入り、ドラマや映画から火が付いた日本における韓流ブームは、その後、アイドルやアーティスト、音楽、ファッション、コスメ、食べ物等の生活スタイルにまで広がり、幅広い年齢層に支持されている。20年以上にわたって継続している現象であるが、現在、第4次ブームを迎えているといわれる²⁾。

2012年、韓国の李明博大統領による竹島上陸後、日韓関係の悪化が見られたが、韓国アイドルやアーティストを熱狂的に支持する日本の10代、20代の若者たちによる第3次韓流ブームが到来し、その中で2018年に日本語に翻訳出版されたのが『キム・ジョン』であった。翻訳者は前述の通り、本著者である。

この本は、ある一人のありふれた女性の人生を淡々と綴る本であるが、「社会に存在するジェンダー不平等を可視化させるという明確な目的を持った、コンセプト的な小説」（同上：25）であったという。また、「社会のシステムに問題がある限り、個人の性格や努力だけで解決はできない」ものがある、ということを著者はこの小説で伝えたかったはずだと翻訳者でもある斎藤は述べる（同上：34）。

『キム・ジョン』は2016年に韓国で出版され、2年後の2018年に日本で翻訳出版された。韓国では100万部を超えるベストセラーとなり、日本でも発

行部数は20万部を超え、大きな反響を呼んだ。この現象を、著者は『『82年生まれ、キム・ジョン』の降臨』と表現する。2016年は、韓国で「江南女性殺人事件」とそれに対する抗議行動、また# Me Too運動の広がりなど、フェミニズムの盛り上がりが見られた年である。一方、2018年といえば、日本では福田財務事務次官が女性記者に対するセクハラ発言で辞任、東京医科大学等の医学部不正入試問題が発覚した年である。女性たちの怒りが沸騰し、フェミニズムの裾野が広がるような動きがあるなか、『『キム・ジョン』はその渦中へまっすぐ投下されたという印象を、私は持った』と著者はいう(同上: 20)。

一連の事件を受け、男女平等神話が崩れ去り、不平等な現実に対する女性たちの怒りが可視化されつつある中で、『キム・ジョン』は日本の多くの女性たちに、「私(たち)の物語」として受け入れられたのではないだろうか。「日本の読者が韓国の小説を熱心に読む」ことによって、「自分の言葉や自分の物語が引き出される」という現象が至る所で見られたということが大変興味深い。この光景は、この本の翻訳者である著者にとっても驚きであったようである。

この本の主人公は、1982年、ソウル生まれのキム・ジョンという女性である。キム・ジョンという名前は韓国ではよく見られる平凡なものである。実は、この登場人物は作者が意図的に生み出した韓国社会における典型的な、ありふれた女性像だという。韓国で最も多い姓である「キム」と、1982年で最も多かった女兒の名前である「ジョン」から戦略的につくられたキャラクターであった。これらは「彼女が経験した女性としての失望や悲しみは個性や性格のせいではなく、社会システムに起因するものだということを訴えるため」であり、そのため、ジョンには「顔」が描かれていない(同上: 26)。作者の戦略が功を奏して、『キム・ジョン』は日本の女性たちにとっても、「私(たち)の物語」となったのであろう。

ジョンの経験の多くは、読者たちにも覚えのあることだ。日本では特に、自分自身が封印してきたいやな思い出、例えば不当に扱われたのに一言も反論できなかつた体験などを思い出して泣いてしまったという声が多

く聞かれた。（同上：27）

『キム・ジョン』について、「この本は一種の『フェミニズム養成めがね』だったのかもしれない」と著者はいう。このめがねを「身につけて自分の歩みを振り返ると、個人的な嫌な思い出と想ってきたことに個人を超えた理由があるとわかり、自分が社会的な存在であることが見えてくる。自分も当事者なのだという認識を読者にもたらしたことの意味は大きい」からである（同上：27）。実際、この本を読んで大泣きしたとか、これは私の話だなどといった感想を述べる読者は少なくなかったという。「『キム・ジョン』の降臨」である。自身が女性差別を受けている当事者であり、この差別は社会構造に起因するものであることに気づくという「覚醒」が読者の多くにもたらされた。齋藤は、「個人の中の社会と社会の中の個人を浮き彫りにする韓国文学の底力」を痛感したという（同上：41）。

歴史的に、「国民全体が共有する『大きな物語』を背負ってきた韓国」に比べて、それを持たない日本は何が異なるのか。韓国より早い段階で経済成長を果たし、「個人の物語と社会とのかかわりが可視化されにくく」い日本では、生きづらさを感じる女性たちもまた、個人と社会とのつながりを見い出せず、生きづらいのは自分に原因があるのだと思い込み、声をあげられずに沈黙してきたのかもしれない。そこに、『キム・ジョン』が「降臨」し、女性たちの「覚醒」を促し始めた。「日本の文化コンテンツは覚醒を促す構造になっていなかったということでもある」と齋藤は指摘する（同上：41-42）。ジェンダー研究に携わり、それぞれの教育機関でジェンダー教育に従事してきた研究者・教育者たちは、齋藤のこの言葉をどのような思いで受け止めるであろうか。そもそも文化や教育、研究は異なるジャンルのものであるとはいえ、ジェンダー研究・教育が目指しているのは『キム・ジョン』とそれほど遠くないところにあるのではないだろうか。

齋藤も指摘する通り、男女雇用機会均等法の制定等、制度的には男女平等が韓国よりも早く制度化された日本社会において、実際の男女平等をめぐる状況はどうか、ということ「改めて突いた」のが『キム・ジョン』という韓国で生まれた物語だったのである。日本のある読者は、『キム・ジ

ン』を読んで泣くのは、「私たちがすでにそれを“知っている”からだ」と述べたという。つまり、既に知っているのに言語化できずにいた思い、可視化できずにいた思いが、『キム・ジョン』によって「覚醒」されたのである（同上：42）。斎藤は、『キム・ジョン』降臨について振り返り、「あの経験を一言で言うとするれば、『物語の力を見た』ということに尽きる」といっている（同上：43-44）。

『キム・ジョン』文庫本の出版にあたり、作者であるチョ・ナムジュは「日本の読者の皆さんへ」として、次のように書き留めている。

私は、誰も女性だからという理由で卑下や暴力の対象になってはならないと考えてきました。女性たちの人生がゆがんだ形で陳列され、好き勝手に消費されていると感じました。女として生きること。それにともなう挫折、披露、恐怖感。とても平凡でよくあることだけれど、本来は、それらを当然のこのように受け入れてしまっはいけないのです。そういう物語を書きたいと思い、そこから『82年生まれ、キム・ジョン』という小説は始まりました。（中略）日本の読者の方々にとっても『82年生まれ、キム・ジョン』が、自分をとりまく社会の構造や慣習を振り返り、声をあげるきっかけになってくれればと願っています。あなたの声を待っています³⁾。

なお、同書の「解説——今、韓国の男女関係は緊張状態にある？」で翻訳者・編集者である伊東順子は次のように指摘する。

この小説では、夫のチョン・デヒョン以外の男性には名前がない。父親も祖父も名前は書かれず、すべて親族名称のみで記されている。キム・ジョンの姉キム・ウニョンや義妹チョン・スヒョンにまで与えられている名前が、弟には与えられない。ずっと「弟」のまま。さらに職場の同僚も、病院スタッフも、女性だけが名前をもっている。男たちに名前など必要ない——強烈なミラーリングである⁴⁾。

韓国や日本の実社会の女性たちは、「誰々のお母さん」「誰々の奥さん」と呼ばれることが多く、自分以外の他者によって規定されることが通常である。社会に出れば、自分たちの名前を持つことは許されない。『キム・ジョン』の作者は、女性の登場人物をフルネームで描き、男性はキム・ジョンの夫以外には名前を与えていない。実際の社会とは正反対の状況を小説の中で描くことによって、社会問題を浮き彫りにするという作者の戦略がここにも表れている。

「構造的な問題について考える余裕」と「他人への想像力」

本書は『キム・ジョン』が日本にもたらしたフェミニズム・インパクトとも言える現象から始まるが、それ以降も、韓国の凄惨な歴史と社会問題を紐解きながら文学作品の紹介が続けられる。民主化によって初めて真相が明らかにされた1948年の済州島四・三事件や1980年の光州事件は、韓国の多くの人々に衝撃を与えたことは想像にかたくない。「韓国現代史は『死を殺す』という行為を積み重ねてきた」という歴史家の韓洪九の言葉が本書では紹介されている（同上：100）。韓国には死を追悼する前に、死を可視化すること、死を回復することが必要だった歴史がある（同上：101）。

斎藤は、「日本よりも早く荒々しい新自由主義の洗礼を受けた韓国の経験からは、さまざまなことが学べる」という（同上：78）。新自由主義は大きな格差と多くの悲劇を社会にもたらした。これからの時代に必要になるのは「構造的な問題について考える余裕」と「他人への想像力」だという。これは、韓国の作家であるファン・ジョンウン（短編集『誰でもない』斎藤真理子訳、晶文社）の言葉である。韓国文学にはこの想像力が「すみずみに息づいている」し、本書で取りあげた韓国の作家たちは、「自分に見える限りの経路に責任を持ちつづけようとしている」ようにみえるという（同上：78）。

「韓国文学の底流には、苦しむ人たちを描いてこそ文学だという強い信念が存在する」（同上：136）。撤去民や労働者の悲劇を描いたチョ・セヒ『こびとが打ち上げた小さなボール』と、水俣病患者の姿を文学的な手法で記録したともいえる石牟礼道子『苦海浄土』には共通点がある。これらの作家は、

「声」を届けなくてはならないと思う対象(チョ・セヒは撤去民や労働者、石牟礼道子は水俣病患者)に出会い、それらと連帯することを共にめざした。いずれも重層的で立体的な手法を用いて対象者たちの「声」を表現したが、「自分の文学的達成のためだけでなく、また啓蒙のためだけでなく、対象との連帯のために文体を精練した」ということが決定的に重要な意味をもつのである(同上:140)。

斎藤は、2023年11月から月に一回、沈黙読会という実験的な読書会を開いている。主催は、本書籍の出版社である株式会社イースト・プレスのイベント事業担当のマプロfondである⁵⁾。参加者は参加費を支払い、会場で斎藤を交えて読書をし、読書の振り返りや読書体験の共有、読書に関する相談等を行う。ライブ配信やアーカイブ配信も実施されている。第1回のテーマは『『韓国文学の中心にあるもの』を読む』であった。

この読書会のイメージは、「夕方に路地で見られる『猫の会議』」だと斎藤自身は述べている。

『韓国文学の中心にあるもの』という本を書くために、韓国と日本の小説をたくさん読んだ。

小説とは何て変な、不思議なものだろうと改めて思った。

他の人が苦勞して作り上げた文字の集積がなぜ私の脳の中でも「物語」と呼ばれるものを構成しうるのか。

読んでいるとき、私たちはいったい何をしているのか。

それを知るために、読書の仕方を一度シャッフルしてみたい。

そんな気持ちで恐る恐る始めてみることになりました⁶⁾。

斎藤が読書の仕方を「シャッフルしてみたい」と思うに至った契機が本書の執筆であった。この読書会は、『キム・ジョン』で痛感した「物語」の力、そして、本書をしたためる中で改めて感じた「物語」を読むという行為の意味について、「構造的な問題について考える余裕」と「他人への想像力」を保ちつつ、読者と「連帯」することを通して考えるための斎藤自身による試みなのかもしれない。

韓国文学と朝鮮戦争

「韓国文学を読むうえで、いちばんの要となるのは朝鮮戦争だ」と齋藤は明言する。朝鮮戦争は「文学の背景ではなく、文学の土壤に染み込んでいる。もっといえば、それは韓国文学の背骨に溶け込んだ、カルシウムのようなものかもしれない」ともいう（同上：178）。朝鮮戦争が共産主義か資本主義かというイデオロギー戦争であったことは、いまではよく知られている。しかし、当時、朝鮮半島の多くの人々はそれらが何かについてすら知ることもなく、近代的国家や国民という概念についての理解も希薄な状態で、誰が敵か味方が判別することもできないままに殺されていった。「密告と密告返し連続の中で、私的な報復としての殺人」が多発した結果、地域コミュニティも崩壊するほどの残酷な戦争であったという（同上：188）。

ファン・ジョンウン『年年歳歳』（齋藤真理子訳、河出書房新社）に登場するおばあさんたちは、次の戦争を常に警戒しつつ、同時に、「すきさえあれば人にもものを食べさせようとして常に怠りない人々」として描かれている。「彼女たちの緊張と情愛の深さは韓国文学の背骨を支えているし、それこそが、韓国文学の土壤に染み込んだ歴史のエキスの本質なのだ」と齋藤はいう（同上：237-238）。

「救いようのない死の蓄積の上に今がある」という現実が韓国にはあり、「韓国の表現者たちには、それをしっかり受け止めた上で物語を見わたす胆力のようなものが備わっている」（同上：260）。韓国の人々は、そのような歴史の中で懸命に生き延びてきたのである。日本の植民地支配の結果、その後展開される戦後処理のプロセスや歴史において、朝鮮半島の人々自身による「選択」は不可能だった。韓国の文学には、そのような歴史の重さが通底している。「本書で取り上げた作品群には、作家たちが歴史の中の『無念さ』の側に体重をかけているその分だけ、現実の生を未来の側から労わるような治癒力を感じることがある」と齋藤は表現している（同上：294）。

植民地支配、南北分断、軍事政権支配、朝鮮戦争という韓国の歴史において、朝鮮半島の人々に選択の余地はなかった。「群として選択肢を失った結果、一人ひとりが厳しい選択を迫られ、選択の自由がないのに、選択の結果

があまりに重い」(同上:158)。これが韓国の人々が経験した過酷な現実であった。1945年の日本統治からの解放直後には、韓国社会で「絶対支持でなければ決死反対」という空気があり、中間であることが許されない、「選択しないことが許されない」という状況であった。「朝鮮戦争が始まった後は、戦線が動くとともに地域の支配者が入れ替わり、敵味方が逆転して、昨日の告発者が次の日には告発される側に回るといったことが日常的に起きた」のである(同上:165-166)。

パク・ミンギョ『ピンポン』(著者訳、白水社、2017)においても、選択が一つのテーマとなっている。「選択主体と選択の責任への明確な意識」が前提にあり、「何かを選ばなかったことは、何かを選んだこと」であることが描かれるのである。「個人には大きすぎる選択を不条理に強いられて、そこに立たされているという状況」がそこにはある(同上:167)。

李清俊『書かれざる自叙伝』(長璋吉訳、泰流社、1978)の主人公が、「結局、『選択』と『選択しないこと』のうち、『選択しないこと』の方を選択した」と口にする言葉がある。「人間は常に選択させられている存在だという強い意識」が感じられ、「ここにも、韓国の近代史が始まって以来の、『本当は選択の余地などなかったのに、選んだ結果をとらされてきた』という歴史が滲んでいる」と斎藤はいう(同上:167-168)。

崔仁勲『広場』においても、何も言わなかったら『『反共』を選択したことになってしまう』という韓国人の葛藤が描かれていたのではないかという(同上:172)。

戦線が移動して支配者が入れ替わるたび、共産主義が何か、資本主義が何かという知識も持たない人々が罪に問われた。山野を戦線が移動した朝鮮戦争では、山中の小さな村々も戦場になる。(中略) 占領者がいつ入れ替わるかわからない日常の中で、人々は相互に監視し合い、白か黒かを常に問われ、中間は許されなかった。緊張の連続だったが、しかし何にどう緊張したらよいか見当がつく人は少なかつただろう。多くの人、わけもわからないまま書類にハンコを押したり、動員されて集会に参加して歌を歌ったというだけで、不条理な死に追い込まれた。(同上

186-187)

選択できない状況に置かれている人々がいること、何と何の選択を迫られているのかすらわからない人々がいるということ、それでも命がけの選択を強いられる状況がしばしば発生してきたこと、そして、そのために命を落としてしまった人々が多くいたということを齋藤は繰り返して語る。そして、それらの声なき人々の声に耳をすませ、チョ・セヒや石牟礼道子が自身の作品でそうしてきたように、齋藤もまた、それらの「声」を代弁し、「連帯」しようと本書で試みているように思われる。

日本の社会や歴史を相対化し、正しく理解するために、日本の読者にとって韓国文学は大きな役割を果たすだろうと齋藤は考えている。「日本の歴史は、朝鮮半島の歴史と対照させて見るときに生々しい奥行きを持つ。この奥行きを意識することは、日本で生きる一人ひとりにとって、必ず役に立つときがある」（同上：5）。それは、私たちを「励まし、また省みさせてくれる存在」でもある（同上：6）。

韓国の文芸評論家であるシン・ヒョンチョルは「良い小説は価値ある失敗の記録」だというのが、「価値ある失敗というにはあまりに無惨なことが歴史の上には多すぎたし、それは今日も不断に起きている」と齋藤はいう。しかし、「失敗が『価値ある失敗』になりうるのかどうかは、常に、私たちのこれらにかかっているだろう。いささか楽観的にすぎるかもしれないが、海外文学を読むという行為そのものがおそらく、悲観とは反対の方向を向いている」と齋藤は明るい方向への視線を忘れない（同上：304）。

日本が敗戦後、朝鮮戦争特需から高度経済成長時代を経て、発展してきたという歴史について、ここでは「特需の恥」と表現される。ただし、「恥があるということは恥ざべきではありません」ともいう。朝鮮半島の日本による植民地化についても同様、「今生きている人間が、後世に恥を残さない方法を考案するしかない」というのである。「過去の歴史を学んで忘れないことは、そこにありえたかもしれない未発の夢を手探りすること」であり、「そのためにも文学は有用だ」というのである（同上：308）。

朝鮮半島に限らず、中国や台湾、ミクロネシア諸島等の植民地・占領地支

配の歴史を今の時代に生きる私たちが学び、そして、次の世代へ「恥を残さない」方法で伝えていくことが求められているのであろう。

エンパワメントするために

どうして韓国文学が現代日本社会に生きる女性たちをこれほどまでに惹きつけるのか。『キム・ジヨン』やその後の韓国フェミニズム文学は日本の女性たちの多くをエンパワーし、「覚醒」させたのはなぜか。「これは私(たち)の物語だ」と少なくない日本の女性たちが語ったという。斎藤は、日本の文化コンテンツは日本の女性たちを覚醒させるには至らなかったといった。この違いはどこにあるのだろうか。斎藤の言葉を借りれば、日本の近現代史の結果として、現代の日本人が国としての大きな物語を共有していないとか、社会構造と個人を結び付ける視点を獲得していないなどの原因があげられるであろう。さらにいえば、他者への想像力が不足しているといえるのかもしれない。

ひるがえってみれば、ジェンダー研究に従事する研究者は日々研究に励み、発表や論文という形式で発信を続けているが、それらの試みがどの程度、日本の女性たちをエンパワーできているのかといえば、大変心もとない。私たちの「声」が響かないのはなぜだろうか。『キム・ジヨン』にあった「物語」が、私たちの研究にはないということだろうか。そうだとすれば、私たちは誰のために、誰の「物語」について懸命に分析し、考察しているのだろうか。

朝鮮戦争特需について、斎藤は「恥があるということは恥ずべきではない」「今生きている人間が、後世に恥を残さない方法を考案するしかない」と述べている。「構造的な問題について考える余裕」と「他人への想像力」を持ち、次の世代に「恥」を残さないようにするためには何が必要か、改めて検討する必要があるだろう。

2014年、韓国で発生したセウォル号沈没事故では、300人を超える修学旅行中の高校生が乗船しており、その多くが命を失った。「徐々に傾き、子供たちを道連れにして沈んだ船は、国家の傾き具合を明瞭に示した」と斎藤はいう。この事故発生後に登場した文学はセウォル号以後文学といわれるが、「現

在の韓国文学を読んでいると随所に、大人として、自分より若い人への責任をどう果たしたらよいかという生真面目な問いかけが感じられる」という（同上：59）。

子どもたちを道連れにしないために、私たちにできることは何だろうか。いわゆるジェンダー研究とは、ジェンダーについての考察を深め、性差による不均衡を可能な限り解消することを目指すものだとすれば、私たちは次の世代に対して、これまでどの程度の責任を果たすことができたといえるのだろうか。

チョン・セラン『フィフティ・ピープル』（斎藤真理子訳、亜紀書房、2018）は、作者が東京渋谷のスクランブル交差点から構想したという、ある大病院にかかわる50人の人生が交錯する様子を描いたショートストーリーである。イ・ホという70代の医師が、ソ先生という若い医師に次のように語る。

私たちの仕事は、石を遠くに投げることだと考えてみましょうよ。とにもかくにも、力いっぱい遠くへ。みんな、錯覚しているんですよ。誰もが同じ位置から投げている、人間の能力は似たりよったりだから石が遠くに行かないって。でも実は、同じ位置で投げているんじゃないんです。時代というもの、世代というものがあるからですよ。ソ先生はスタートラインから投げているわけではないんだよ。私の世代や、そして私たちの中間の世代が投げた石が落ちた位置で、それを拾って投げているんです。わかりますか？（中略）でも、傲慢にならずにいきましょうよ。どんなに若い人にも、次の世代がいるのですから。しょせん私たちは飛び石なんです。だからやれるところまでだけ、やればいいんです。後悔しないように⁷⁾

研究とは、先行研究の蓄積の上に新しい何かを積み重ねていく一連の取り組みである。ジェンダー研究にも、多くの先人たちの努力や実践の蓄積がある。現代に生きる私たちは、先人たちが投げた石が落ちた位置から、研究や実践をスタートさせている。そして、さらに次の世代は、私たちが投げた石が落ちた位置で、その石を拾って投げるのであろう。いま問われているのは、

私たちがどこまで遠く自分たちの石を投げられるのか、である。飛び石としての一人ひとりの研究者は、傲慢になることなく、石を投げ続けることしかできない。ただ、次の世代がスタートする位置を決めるのは、私たちである。後悔しないように、石を投げ続けたい。

【注】

- 1) 斎藤真理子 (2022) 『韓国文学の中心にあるもの』 イースト・プレス.
- 2) 朝日新聞 (2023) 『『韓流』20年、若返るブーム』 (2023年3月24日夕刊) 朝日新聞クロスサーチ.
- 3) チョ・ナムジュ, 斎藤真理子訳 (2023) 『82年生まれ、キム・ジョン』 筑摩書房, 200-202.
- 4) 同上 222.
- 5) 株式会社イースト・プレス マプロフォンド「沈思黙読会 第1回 斎藤真理子『韓国文学の中心にあるもの』を読む」. <https://teket.jp/6979/27724> (2024年2月26日)
- 6) 同上.
- 7) チョン・セラン, 斎藤真理子訳 (2018) 『フィフティ・ピープル』 亜紀書房, 449-450.

初版第一刷、328頁、1500円+税、イースト・プレス、2022年
(ぜにつぼ さちこ・鎮西学院大学准教授)